イワクラ探索記録

「奈良の巨石」を訪ねて

超歴史研究会　http://www.page.sannet.ne.jp/tsuzuki/

皆神　隆

古の都「奈良」は、斑鳩、橿原、飛鳥、吉野などなど歴史ファンにとっては見所が多く、興味が尽きない地域である。かつて奈良駅を出発し、吉野、天河、十津川を経て熊野へと旅をしたが、奈良の奥の深さを思い知らされたことがある。そして、今回もまた再び、その奥深い歴史の一端を垣間見ることとなった。２００４年１２月１８～１９日、大阪へ出張した帰り道、イワクラ学会事務局の柳原さんの御推奨により、同事務局の高橋さんに御案内をいただき、奈良周辺の巨石を探訪することができた。

１２月１８日、近鉄榛原駅にて高橋氏と落合い、駅前の観光案内板を見ていると、高橋氏が、ここに珍しい神社があるという。それは、奈良県宇陀郡榛原町に鎮座する「八咫烏神社」である。祭神は武角見命、通俗オトゴロス社といわれ、創社は７０５年と伝えられる。江戸時代に、これまで石神殿であったものが春日造りの社殿となったという。八咫烏は神武天皇が熊野から大和へ入ろうとしたときに道案内し、重要な役割

イワクラ学会会報

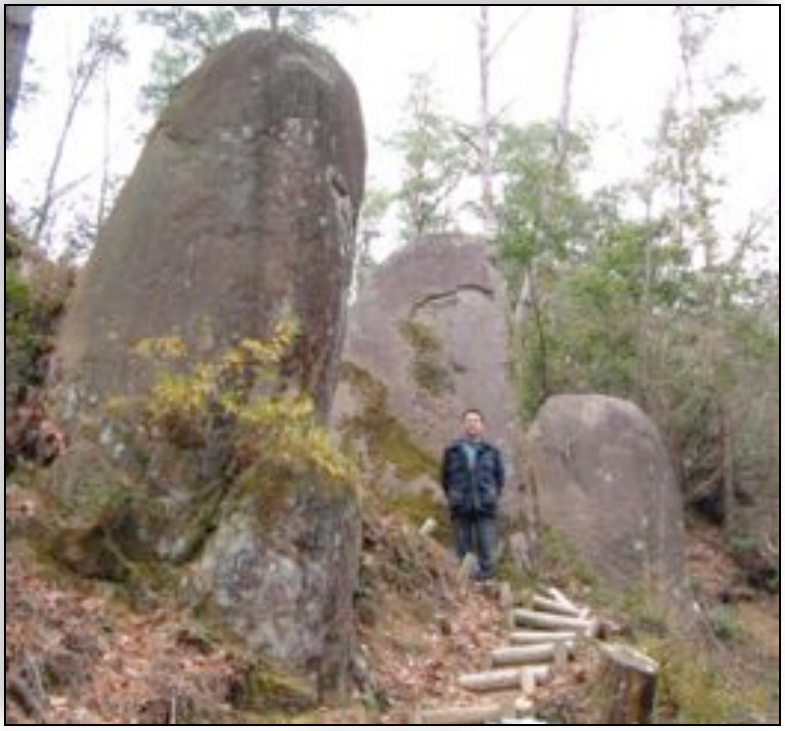
写真：八咫烏神社境内

を務めたと古事記、日本書紀に伝えられている。京都下賀茂社の旧宮司は鴨県主の子孫というので、古来当社に一度は参拝するか奉弊使を送ったが、明治初年頃貧村のゆえ、これを中絶したという。八咫烏は、ある種族の名称と考えているが、鴨氏との関係が深かったことが伺える。石神殿であった社殿が春日造りに造り変えられてしまい、本来の信仰形態が解らないのは残念であるが、なぜ江戸時代にあえて造り変える必要性があったのか、疑問が残る。いずれにしても、この裏山にはイワクラが存在すると思われる。今後の調査に期待したい。

写真：嶽太郎

イワクラ学会会報

写真：嶽太郎周辺



写真：嶽三郎

続いて、近くの嶽山へ足を踏み入れた。車を降りて少し歩くと、いきなり巨大な石が姿を現わした。まずはじめは、「嶽太郎」である。代表的な石には名前が付けられているという。地中に埋まっている部分がどれほどあるのか、見当もつかないが、高さ2．5メートル程、直径は根元で2メートル程の巨大なメンヒルである。そして、辺りを見回すと同じ位の立石が山の斜面にぞろぞろ立っている。この景観は石好きには、たまらない絶景である。このようなメンヒル状の石が林立しているのは、日本では珍しいと思われる。大分県の安心院の京石を連想するが、あちらは直径が数十センチメートル程度の太さであるが、こちらは2～3メートル程度と巨大である。奈良の石と言えば、飛鳥の酒船石、益田の岩船、亀石等が有名であるが、このようなすばらしい巨石群が存在することは知られていない。貴重な遺跡である。幸い観光地として道も整備され、保存されているようであり、破壊される可能性は低いと思われるので、安心した。

写真：嶽次郎

山中を進むと、次に姿を現わしたのが、「嶽三郎」である。巨大な三本の石柱が並んでいる。このような三つの石の組合せはよく見られるが、天地人、仏法僧、父と子と精霊のように宗教的な意味があるものと考えられる。この上にはひとつのメンヒルがさらに立っている。

そこから戻る方向には、「嶽次郎」がある。上部が割れて下に落ちているが、この石は形状が少し異なり、

イワクラ学会会報

写真：蛇石

イワクラ学会会報

上のほうが太くなっていたようである。この付近の石は最低5個の石が直線上に並んでいるようだ。さらに進むと林道へ抜けて、そこには「嶽立石群」と記載された立札があり、近くには小さな祠が祀られていた。

ここ嶽山には、三種類の石があると案内されており、「立石」、「蛇石」、「寝石」と駅前の案内図に書かれていたが、次に「蛇石」を訪れた。その名前の由来は知らないが、幅3メートル、長さ7～8メートル、高さ1メートル程度の平らな石である。側面に波状のスジがいくつか入っており、見る方向によっては、蛇のように見えるような感じがするが、どうであろうか。

興味を惹かれたのは、この近くにあった石群である。一番上の大きな石が気になり、下へ降りてみると、イワクラらしい雰囲気である。斜面にある石群で、中心の石はメンヒル状の立石である。さらに下にもいくつかの石があり、御神酒を供えた跡があって、現在も信仰されている証拠が残されていた。そこには薄い屏風状の石があり、祀り場となっているようであった。高橋氏もこのイワクラは初めて見るとのことで、今までほとんど気づかれずにいたようだ。方向としては、東側から西方向を拝するような形となっている。また、蛇石の近くには、他にも石が散在しているが、直径3センチメートル程の穴が深さ15センチメートルも穿たれている石があった。

残るは「寝石」であるが、これもかなり巨大な石であり、山中に横たわっているが、立石に対して横になっていることから、寝石と名付けられたようである。この周辺には比較的丸い形の石がたくさんあり、立石群とは対照的な場所となっている。植林のために見渡すことは不可能であるが、このなかに、イワクラが存在する可能性は否定できない。

続いて御案内いただいたのが、高橋氏一押しの癒しスポットである奈良県宇陀郡室生村の「室生龍穴神社」である。下社、中社、奥社というような名称はないが、最初は中間にある「天の岩戸」を訪れた。二つの石の間に注連縄が張られており、二見興玉神社の夫婦岩を想起するような

写真：蛇石周辺磐座

イワクラ学会会報

写真：寝石

写真：龍穴神社境内天岩戸

イワクラ学会会報

光景である。所謂、鳥居の原型といえるものであるが、位置関係から、この間を通って奥社方向へ向うことはできない。この石の手前、向って右手奥には祠が祀られていた。

さらに山中を進むと、「吉祥竜穴」という看板と鳥居があり、そこを入って下ったところに、巨大な岩盤が露出した、開けた場所に緩やかな川が流れている。その川の向い側に竜穴が見える。これが龍穴神社の奥宮とされるところである。ここは、自然の造形のすばらしさに魅せられる、まさに癒しスポットである。静かな水の流れる音と、時折聞こえる鳥のさえずり以外は何も聞こえない静寂

写真：龍穴神社吉祥龍穴

の世界がそこにはあった。

順序が逆になってしまったが。山を下り、龍穴神社へ参拝した。拝殿の奥には春日造りの本殿があった。境内の案内板には次のように記されている。「祭神：高オカミ(雨シタニ龍)神　配祀：天児屋根命、大山祇命、水波能賣命、須佐之男命、埴山姫命。主神　高オカミ神は伊邪那岐大神其御子迦具土神を斬り給へる時生まれせる神にして水火を司るの威徳を具へ給ひ晴雨を調節して国土民生を安じ給ふ。蓋し農を以て国の本とする我国古来の伝統的民族信仰として旱天に慈雨を祈るの風朝野を挙げて後を絶たさりし所以にして木津川、淀川の上流の当地に此大神の鎮まります事深く故なしとせず。随って古来歴朝朝野の信仰篤く祈雨止雨の奉幣に預り給ふ事度々にして神階は度々昇叙されて應和元年正四位下に叙せられ給ふ。延喜の制貴船丹生等の社と列びその神威赫々たる官幣小社に列せられ所謂式内社として近畿一円に衆庶の信仰篤く以て今日に及べり。配祀の祭神は古来聚落の叢祀に奉斎せしを明治末年に合祀せり。」この下

写真：室生龍穴神社

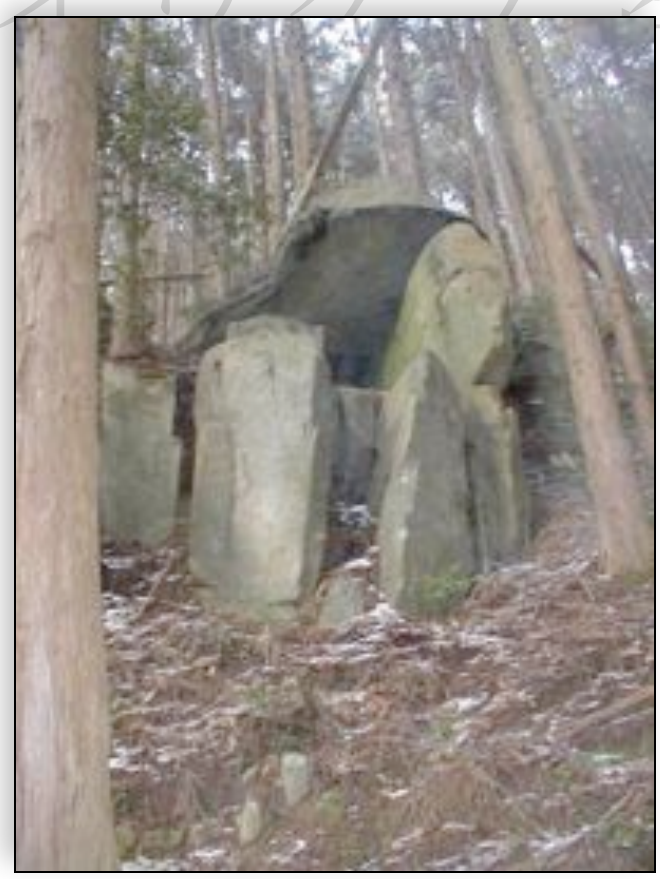
社も静かで神さびた、すばらしい神社であり、太古から続く自然信仰の姿が偲ばれる。本来、正式には下社の龍穴神社へ参拝し、社務所へ申し出て浄衣を着用の上で奥宮へ参拝することになっている。しかしながら、社務所には誰もいないことがほとんどのようである。近くの室生寺には多くの人が訪れるが、この神社を訪れる人はほとんどいないようであるが、石好き、神社好きの方にはお奨めの神社である。

ここで注目されるのは、奥宮である吉祥竜穴の位置は、かの「太陽の道」である北緯３４度３２分のライン上に存在することである。ということは、太陽信仰に関係することになるが、正しくここは三輪山の真東に位置している。三輪山は大蛇、こちらは龍であり、今年5月の三輪山参拝時は大雨、今回も小雨がぱらついていたのは、龍神様に歓迎されていたということらしい。太陽信仰と蛇神信仰、どちらも死と再生のイメージから永遠の命を象徴し、それを人々が求め、崇めたという考え方があるが、農耕が始まってからは、天

写真：犬戻岩

候に依存する必要性が高まり、太陽と水の神への信仰が深まったと考えられる。

次に少し奈良県を外れるが、三重県伊賀市法花の竜王山へ向った。「応感神社」の裏手には「犬戻岩」という巨石があり、その先には竜山遥拝所があった。この上には巨石があるに違いないという確信があったが、残念ながら日没となり、山を登ることは断念した。後日、高橋氏よりドルメン状のイワクラの写真をいただいたので、紹介する。応感神社とは珍しい名前だが、主祭神は応感之神（尊号）、祭神は建御名方之命、宇迦能御魂命、五男三女神、速玉之男神、建速須佐之男尊、譽田別尊、大山祇神である。応感の神号は、諸祭神の総称にして衆民の信心神明に通じ、霊験著しい尊号を言うとある。竜山



写真：竜山のイワクラ

写真：鹿谷寺跡の十三重塔

カイト原石を噴出した。近畿各地で発掘される石器のほとんどが二上山産のサヌカイトで作られたものと推定されている。勾配がきつく、修験の山らしい、厳しい山である。やがて「史跡鹿谷寺跡」に到着、地山の凝灰岩を彫り残して作られたという十三重塔が見られる。八世紀頃の寺院の跡で、その東側の石窟内には如来坐像三体が線彫されている。「大陸の石窟寺院の趣が看取され、上代における佛教関係の類い稀な遺跡とし

写真：二上山岩屋

（竜王山）山中には他にもいくつかのイワクラが存在するということであり、今回見ることができなかったのが誠に残念である。

それにしても、奈良を中心とした地域には、まだまだ多くの巨石、イワクラが存在することを目の当たりにして、さらなる調査の必要性を実感した。

明けて１２月１９日は、柳原さんの御推奨により、奈良県北葛城郡當麻町にある「二上山」へ向った。登山口までは柳原さんに車で送っていただき、南側から登り始めた。金剛生駒国定公園に位置する二上山は雄岳と雌岳よりなるトロイデ型火山であり、約２０００年前には噴火活動をしており、石器の材料となるサヌ

イワクラ学会会報

て貴重である。」と案内板に記されていた。そこから上は岩の露出部が多くなり、さらに険しい。やがて広い道へ出て、そこを右折し、少し行くと、史跡である「岩屋」がある。中には仏塔等が残っているが、年代は不明とのことである。これらの遺跡の存在は、修験の山として古くより信仰が厚かったことを物語る。少し戻って、雌岳への道を辿り、ようやく広く開けた雌岳山頂へ到着した。山頂からは大和三山が一望に見渡せるはずであるが、残念ながらガスが多く霞んで見えない。ここには大きな日時計があり、これは「太陽の道」がこの近くを通っていて、御来光を拝するのに適した場所であることから造られたとのこと。しばしの休憩の後、雄岳を目指す。雄岳の山頂には「葛木坐二上神社」がある。祭神は豊布都御霊神(建御雷神)(武神)、大国御魂神（文神）であり、文と武の神としてあがめられている。この神社には社殿が無く、御神木があるだけの太古の形式を残している。神社の隣には役の行者が置いたという経塚があり、少し下ったところには、

写真：葛木坐二上神社

天武天皇の皇子「大津皇子の墓」がある。随所に歴史を感じさせる山であるが、かつて活発な火山であったことから、石器時代、縄文時代よりの信仰があったことが伺える。

北東へ下ったところには、葛木坐二上神社の下社、葛木倭文座天羽雷命神社、加守神社が合祀されている。その後、二上神社口から近鉄で近鉄奈良駅へ向い、高橋氏と合流して柳生を目指した。そして、柳生家の修練の場であった奈良県奈良市柳生町の戸岩谷を訪れた。鳥居をくぐり、山道を進むと、突然巨大な石が姿を現わした。「天乃石立神社」の巨石である。神代の昔、高天原で手力雄命が天岩戸を引き開けたとき、その扉石が虚空を飛来し、この地に落ちたという伝説がある。祭神は、天照大御神、豊盤門戸命、櫛盤門戸命、天盤戸別命である。神体は扉の形をした巨岩（花崗岩）であり、前伏盤、前立盤、後立盤の三つに割れている。前立盤は高さ6メートル、幅7．3メートル、厚さ1．2メートルであり、全体が扉の形をしている。そのスケールと形状の美しさに圧倒され、

写真：天乃石立神社　前立盤

時間を忘れて写真撮影に熱中してしまった。その全体像をフレームに収めることは難しく、最も美しい前立盤の写真を紹介する。

さらにその奥には「一刀石」が、その巨大な姿を横たえている。これは約7メートル四方ほどの巨石で、中央で二つに割れている。柳生宗厳の修行中この戸岩谷に分け入ったところ、天狗がいたので試合をした。そのとき、宗厳が一刀のもとに天狗を切り捨てたと思ったが、刀はその場にあった巨石を二つに割っていたという謂れがある。実にきれいに割れている。

とうとう日が暮れてしまった。最後に「ホウソウ地蔵」を見た。丸い巨石に地蔵尊が彫られ、その右下に、「正長元年ヨリ　サキ者　カンヘ四カン　カウニ　ヲヰメアル　ヘカラス」と書かれた碑文があり、これは全国でも稀な徳政碑文といわれているそうである。正長徳政一揆によって行なわれた負債の取り消し(徳政)について民衆が刻み残した資料としての価値は高いとされている。山の斜面にある巨石であるが、この他に

イワクラ学会会報

石があるのかどうか、あるいはこの石がどこかからここへ運ばれてきたものか、それは定かではない。

比較資料として、大分県安心院の京石と茨城県竪破山の太刀割石の写真を紹介する。安心院の京石は、直径数十センチメートル程度、高さは1～2．5メートルと様々である。竪破山の太刀割石は、直径7～8メートルの丸い石が真二つに割られたような形をしている。

２００３年イワクラサミットの際に山添村を訪れて、長寿岩をはじめ、神野山の石群、岩屋枡形岩、岩尾神

写真：ホウソウ地蔵

写真：安心院の京石

写真：堅破山の太刀割石

社の石達に出会うことができた。そして今回の探訪でまたいくつかの特筆すべき、すばらしい石達に出会った。奈良の歴史の広さ、深さを改めて認識し、今後のさらなる調査の必要性と遺跡保護の重要性について考えさせられた。日本は海に囲まれているが、山が多い国であり、人知れず山中に存在するイワクラは、まだ相当残されているに違いない。

最後に、今回のコースを御紹介、御案内いただいたイワクラ学会事務局の柳原様、高橋様に深謝致します。